

## 二〇二四年度学位授与式 学長式辞

卒業生のみなさん、本日はご卒業おめでとうございます。御父母の皆様もお慶びのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。

みなさんが本学で学ばれていた期間の初め頃には、新型コロナウイルス感染症のもと、これまで経験したことがないような生活様式、外出自粛などの辛い状況があったかと思えます。また、みなさんが生を受けられてからも東日本大震災やリーマンショックの影響による就職難など社会的に困難な出来事は様々に起こっております。様々な社会的困難においてどのように振る舞い、どのようにしのいでいくか、人の真価を問われる場面は今後もあるかと思えます。是非心なさってください。

成蹊学園の創設者中村春二も多くの困難に遭った人物でした。成蹊実務学校を池袋に建設し、開校を目前にして新校舎が火事で全焼という悲劇に遭いました。これに挫けずに皆を励まして短期間での再建に漕ぎつけたことはよく知られています。また、吉祥寺への移転を前にして箱根で療養中に関東大震災に見舞われました。この際に、東京から駆け付けた愛弟子との再会を「御無事でとの ことばだけでわ ものたらず かたい握手に かがやく目と目」という詩に詠んでいます。学園史料館の展示でご覧になった方もいるでしょう。

春二が晩年に卒業生に贈った「たしかな足ぶみ」というメッセージがあります。日本語の表現のなかで人生を旅に喩えることは「門出」「分かれ道」「回り道」などよくありますが、ここでは、日々の暮らしを長い道を歩くさまに喩えています。多くの困苦に遭遇した人物が後進に贈った言葉として読むとまた味わい深いものがあります。全文を朗読します。

たしかな足ぶみ

君たちは世の中に出た

学校の窓から見た世の中とは随分と違って居るだろう

がっかりした事もあろうし又こいつは面白いと思つた事もあろうけれど

毎日おなじような仕事をくりかえす事はいやに誰も思つていよう

そしてこんなで一生を送つてはと思う折があろう

しかし毎日目先が変わる事が生きるための必要な条件だろうか

又目先が変わらなければ人の目的がとげられないか

太陽は東から出て西にはいる 冬が去れば春が来る 昼の次は夜だ

自然のものが皆がおなじ軌道を通っている

毎日おなじ仕事をする事をつまらぬと思うものはあわれむべき人だ

同じ仕事の内に種々のふかい意味が潜んでいる

ひとの世の旅路をふりかえって見るとその道の面白さや変化が嬉しいのじゃない

その旅路をふみしめる自身の一足一足の確かさが大事なのである

君達は日々の旅路をしっかりと踏みしめて進みたまえ

この気持ちを失わなければいつとなく知らぬまに緑の山

清い泉の楽しい村里にふみ入れるだろう

『桃源』4号より(原文を常用漢字・現代仮名遣いに改めた。)

道中で回り道をしたり景色を楽しんだり、旅そして人生の楽しみもそんなところにもあるのですが、春二はここでは一步一步歩いていくことの大事さをストレートに訴えています。順調に行っているときには、やや教訓めいたメッセージに感じるかもしれませんが、困難に出会い何らかのヒントを求めていた卒業生は、春二のこの言葉で大きく元気づけられたことでしょう。

どの学校で学ばれたか、そこでどのような影響を受けたか、社会に出てからはあまり意識されることもないかもしれませんが、しかしながら、もし、何かに躓いたことがあれば、ひたむきでまじめに生きた創設者の思いの現れであるこの「たしかな足ぶみ」というメッセージを思い出してください。それが困難を抜け出す一助になろうかと思えます。

みなさんの今後の人生に幸あれと願い、学長としてのお祝いの言葉を結びます。

二〇二五年三月一九日

成蹊大学長 森 雄一